

開催地名：石川県野々市市	
開催日時	令和元年 12 月 18 日（水） 19：00 ～ 20：30
開催場所	情報交流館 カメリアホール椿
語り部	仲條 富夫 （千葉県旭市）
参加者	町内会役員、防災士等 約 60 名
開催経緯	<p>本市は年 1 回、総合防災訓練を実施しており、各拠点避難所の開設、運営訓練を行っている。今年度からは各拠点避難所の町内会役員、防災士等が主体となった避難区防災会を立ち上げ、訓練の企画・運営に取り組んでいる。今後は、訓練で得られた教訓を生かして、拠点避難所のマニュアルや施設利用計画の見直しが必要となってくる。今回の講演では、今後の防災活動の手立てとしたい。</p>
内容	<p>（1）大震災の当日</p> <p>我が家は防波堤から 50 メートルくらいの所に立っているため、東日本大震災発生時は津波が心配ですぐに 2 階から海を見たが、特別の変化はなかった。その後大津波警報が発令され、ほとんどの住民が避難所に避難したが、我が家には寝たきりの母親がいるため、避難を躊躇していた。そこに第 1 波が堤防を越えて自宅前まで来た。その 1 時間後に来た第 2 波は堤防を越えなかったため、自宅に貴重品や着替えなどを取りに行く人がいた。私も一人暮らしの家を見回りに自転車で出掛けたところ、港の水がない光景を目撃して、愕然となった。「これは大変な津波が来る」と確信して大急ぎで自宅に戻る途中で津波に引き倒され、自転車ごと流されたがなんとか助かった。自宅は引き波で潰されてしまった。</p> <p>千葉県旭市では震度 5 強を観測し、液状化現象、飯岡海岸等での津波被害が発生し、死者 14 名、行方不明者 2 名、重軽傷 12 名のほか、住家全壊 336 世帯、住家大規模半壊 434 世帯、住家半壊 512 世帯、住家一部損壊 2,545 世帯を記録した。</p> <p>大津波警報が発令され、防災無線で避難が呼びかけられてほとんどの住民は避難所へ避難した。第 1 波が押し寄せた時は避難所はパニックとなったが、詳しい情報が全く入ってこない状況の中で、第 1 波より弱かった第 2 波を見て安心してしまった部分もあったと言える。このタイムラグにより、犠牲者が出てしまった。過去のチリ地震の際の津波を経験しているにもかかわらず、そして決して甘く見ていたわけではないのに。</p> <p>（2）避難所生活</p> <p>特筆すべきは、ガソリンが不足していたということだ。とりあえず必要な人たちが 5～10 リットルずつ入れれば十分なのに、車を複数所有する人たちがそれぞれ満タンに入れてしまうため、本当に必要な人たちにいきわたらないという事態が発生した。被害状況等の情報が入らないからそうなるのだろう。物資を分</p>

け合うときは、皆が分け合えば必ず足りる、奪い合えば足りなくなるのは当たり前だという精神を持っていないといけない。

ボランティアの方々は、多い時は1日に1,000名近くの方が来てくれた。とてもありがたかったが、午前中に来ていただいて、保険に加入していただいたうえで、各地域に必要な人数を割り振る必要があったため、お願いしたい業務内容や必要な人数等についてしっかりと把握している人がきわめて少ない状況の中では、うまくマッチングができず、活用できなかった。これは他の県、地区でも起こっていた現象だと推察する。

(3) 震災を経験して

自主防災のために必要な設備の予算を獲得するには、個人で申し出ても、なかなか認められない。地区の住民がまとまって、消防団等を何十年も経験しノウハウを持って地域を熟知している人たちを通して申し出る方法が、最も適切である。

支援物資の配給は個人では受けられない。自主防災組織がしっかりしていれば、仮に被害を受けても、その地区に必要な物を地区の代弁者として動ける人が預かってきて、配布することができる。ぜひこれは励行していただきたい。

本日お越しの皆さんのように、防災に関する高い意識と知識を持つ、地域防災の推進者の方々の声が、災害の現場では決断を促すと言える。また、一番大切なことは、「言葉」だと痛感した。多くの人たちが甚大な被害を受けて避難所生活をしている中で、互いを思いやる「言葉」は本当にありがたいものであり、今でも忘れられない。一言でも良いので声かけをして、お互いに励ましあっていくことが、復興に向けての第一歩につながると強く思う。



開催地より

実際に被災された方の体験談だったので、避難所のことや、家族のこと、近隣住民とのつながりの大切さなどを聞くことができた。学んだことをどう行動に移していくかが大切であり、一歩踏み出すことの重要性や、自主防災組織の大切さを強く感じた。